

令和元年6月5日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03046

研究課題名(和文)先住民性が可視化する白人性に関する比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of Indigeneity and Whiteness

研究代表者

太田 好信(OTA, Yoshinobu)

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：60203808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人種から遊離し、暗黙の前提となっている視点を白人性と呼ぶことから出発した。近年、先住民(族)という表現をしばしば耳にするようになってきているが、白人性と先住民性との関係を考察した。先住民性は、白人性を入植者植民地主義としてとして意識することを可能にする。本研究では、ハワイ先住民主権運動、アイヌ民族運動、琉球独立論の比較検討をおこない、白人性と先住民性との関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本ではアイヌ民族が先住民として認められ、また大規模なアイヌ民族博物館も建設されつつある。先住民(族)は、過去に存在した人びとではなく、近代を生きるわたしたちの隣人であり、歴史的にみても、日本を構成する大切な人びとと再認識されている。しかし、残念ながら、先住民(族)と国家の歴史を捉える視点は、十分に国民の間では広がっているとはいえない。博物館は過去の遺物の展示という印象も与えてしまうこともあり、今後はアイヌ民族や琉球民族の存在を同時代の人びと、隣人と捉え、相互理解を進めてゆくべきであろう。本研究はそのような社会的貢献を目標としている。

研究成果の概要(英文)： This study is an exploration of the idea of indigeneity that functions, as a counter-historical concept, to problematize settler colonialism as it appears in the margins of Japan. Its ethnographic as well as historical foci are the following three sites: the Hawaiian sovereignty movements, Ainu political-cultural movements, and Ryukyu ethno-national movements. Its tentatively concludes that the idea of indigeneity unsettles the taken for granted historical understanding of Japan as a modern nation-state, forcing to reckon the on-going process of settler colonialism. It calls for a need of further study in which to investigate how the idea of indigeneity might be coopted/resisted in the coming second decades of this century.

研究分野：文化人類学

キーワード：先住民性 入植者植民地主義 ハワイ主権運動 アイヌ民族 琉球民族 遺骨返還運動 言語復興運動

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、文化人類学における無徴としての研究主体、有徴としての研究客体(対象)という前提を批判することから着想をえていた。しかし、セトラー・コロニアリズム(入植者植民地主義)においては、入植者が先住民を置換するという「消去の論理」が存在するため、先住民性はその消去の論理への抵抗として立ち上がる。それでは、セトラー・コロニアリズムの影響が継続している国家において、研究対象を他者化するという文化人類学は、先住民性の構築とどのような政治的関係を保持するのか、その関係をセトラー・コロニアリズムへの批判がすでに存在する北海道、ハワイ州、沖縄県で実地調査することから解明したいという目標があった。より具体的には、有徴の先住民たちは、無徴の権力を対象化することを保持していることに着目した。たとえば、シャモ、ハオレ、ヤマトウなど、これら民族呼称の運用を検討する調査を構想した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、つぎの二つの段階を踏んで、先住民性が対抗的歴史概念として形成される過程を三つの異なったフィールド(北海道、ハワイ州、沖縄県)での比較から明らかにすることである。(1)不可視である研究主体の存在はパワーと結びついていることが指摘されてきた。反対に、研究対象となる客体は有徴化され、他者化されることになる。文明と未開というこれまでの対立構造の反復ともいえる。(2)不可視である研究主体が可視化されるのは、研究対象からの呼びかけによる。つまり、研究主体に対する「あなたは誰ですか?」という名指しが、有徴化、他者化するという知とパワーのあり方を問題化する。この状況を理解するためには、研究主体が名指される呼称、その意味、それが保持される理由を調査することが必要である。つまり、セトラー・コロニアリズムの歴史において、その歴史を記憶するための機能を、上述した呼称(シャモ、ハオレ、ヤマトウなど)が担っていることになる。

### 3. 研究の方法

理論構築と実地調査(アーカイブでの調査を含め)により、入植者たちを名指す呼称に関する言説研究を進めた。北海道では、アイヌ民族の人びとがシャモ(和人)という呼称をどのような意味で、どのような状況、文脈で、利用するかを、広範囲に調べた。札幌などの都市部、地方(平取町など)での比較をおこなった。ハワイ州。おもに、ハワイ大学アーカイブでの調査をおこなった。ハワイ先住民運動はハオレという呼称で、入植者を名指していた。しかし、戦後、日系人の社会的地位上昇などの結果、ハオレ(白人)と入植者は同一ではなくなる。ハオレではないが入植者として日系人も含まれるようになる。これらの複雑な状況が表面化した事件を文献から明らかにした。沖縄県では、言語(シマクトゥバ)の復興がある。しばしば、消滅寸前にある言語として復興が主張されるが、琉球民族の自立を求める活動家たちは、復興だけではなく、言語が剥奪されてきた歴史への反省を、ヤマトウ(本土人)に求める。これらの活動を調査した。～では、それぞれ民族や言語の輪郭が再固定化される印象を与え、近年の理論的傾向には合致しないと考えられる傾向があるものの、研究主体であるパワーの側に立つ人間の歴史的責任という視点はいまだに重要であると考ええる。

### 4. 研究成果

以下の3点が成果である。

(1)【先住性は、セトラー・コロニアリズムに対するカウンター歴史として構成される。】先住性(indigeneity)は、その土地に誰が先に住んでいたのか、という問いへ回答ではない。すでに、ILO169号条約、ならびにUNDRIPでも示されたとおり、それは植民地主義の歴史の結果生じた概念である。すなわち、植民地主義によりしばしば虐殺と対象とされ、そうでない場合でも土地を簞奪され、同化政策によって言語、宗教、文化を破壊された人びとが、自らが選び取る政治的アイデンティティである「先住民」(indigenous peoples)の根拠となる。

以上から、現在、先住性が主張される社会的文脈において、それを科学により立証される何かと誤認しないことが肝要である。たとえば、自然人類学のDNA解析がアイヌの先住性を立証するとか、考古学がアイヌの先住性を立証するという言説は、この概念に関する無理解に起因する。

セトラー・コロニアリズムは出来事ではなく、継続する過程(process)である。脱植民地化と同じように、政治的独立が獲得されたからといって、終焉しない。しばしば、先住性は21世紀における「脱植民地化の変奏」として現在も継続中であると、いわれる(James Clifford 2013)。セトラー・コロニアリズムは、近代国家を成立させると、その近代国家の理念(リベラル民主主義、最近では多文化主義)を取り込み、その理念を通してセトラーたちの社会的優位性を継続し担保する。

セトラー・コロニアリズムを批判する先住民性が意識すべき状況には、以上が含まれる。別のいい方をするなら、リベラル民主主義や寛容さを基盤にすえた多文化主義を支持する者たちは、先住性がセトラー・コロニアリズムの対抗歴史であることを理解することにより、自らの政治的限界を知り、その自覚を通して、セトラー・コロニアリズムの継続を可視化することが可能になる。それが可視化されないままでは、セトラー・コロニアリズムによって特権的恩恵を受けている者たちが、「万人が個人として平等である」という理念により、自らが歴史的に蓄積してきた社会資本の恩恵を隠ぺいすることに

なる。現在、先住性への反発、反動はこのような形態をとる。

大切なのは、セトラー・コロニアリズムにより形成された歴史を否認し、現代社会は平等な権利をもつメンバーによって構成されているという、多くの人びとが受け入れ、社会的進歩として評価し、手放したりしない価値観を守るという立場から、先住民性をその立場へのアンチテーゼとして構築してみせることである。先住民性に基づく活動は、独自の集団の利権を拡大する欲望に見える構造を提示する。そこにあるのは、自己の立場をそれが当たり前であるという意味で、透明化し、自然化する力(パワー)の機能である。

(2) 【自然化、透明化する歴史的に蓄積されてきた優位性を白人性という】以上の構造を、白人性という概念を通して考えてきたのが、本研究課題である。白人性は「白人性研究(Whiteness Studies)」という研究領域が成立するほど盛んな領域である。そのなかには、白人という「人種」性を扱ったものから、白人性をパワーと結びつけ、視点の自然化、透明化を指すというように、その分野は広い。

白人性とは、もはや人種を指すことばではない。この研究では、いわゆる「白人性研究」の領域では指摘されてきたことであるが、白人性を可視化されない。可視化されるのは、有徴性を帯び、他者化される人びとである、というパワーの展開と直結した立場から研究を進めた。このような視点は、コロニアルな歴史を検討するとき、有意義である。

有徴化された人びとは、研究対象となった。近代社会を研究する社会学との姻戚関係を保持することになる。(人類学は英国では比較社会学であるように。)

白人性と有徴性との弁証法的関係は、いくつかの領域を同時に結びつける概念を提供した。一つには、セトラー・コロニアリズムと先住民性との関係を考えることになる。セトラー・コロニアリズムを歴史として認識してしまえば、それは過去のことであり、現在とは無縁となる。先住民性はそれが現在でも継続中であるということを明示する。セトラー・コロニアリズムは白人性と同じように、不可視となっている。それを可視化するのが、先住民性である。

もう一つ、白人性と有徴性は、人類学の歴史に光を投げかける。人類学の場合、その対象は未開社会であった。白人性は近代と連結する。有徴性は近代が脱却した総体となる。具体的には、その対象は未開社会として表象され、近代とともに消滅の運命を背負わされた人びととして扱われた。人類学は未開に対する近代の優位性を立証するために生まれたのではない。反対に、ロマン主義の影響のもと、未開を追憶の眼差しをもって見つめた。それをレヴィ=ストロースは『悲しき熱帯』という表題で表している。近代が破壊し、その残骸しか発見できない当初の旅。しかし、その向こうには意思の疎通を拒む他者が存在した旅である。彼の哲学的思想が凝縮しているのは、人類学に内在する矛盾、すなわち滅びゆく人びとの生活を、彼らが完全に消滅する前に記録に留めることである。

人類学と先住民社会との関係も、このロマン主義によって媒介されていた。近代主義は進歩史観である。20世紀初頭の(社会)進化論のように、未開社会をヨーロッパ社会の古代と措定した。(ヨーロッパからみた)僻地は、進化論的視点からすれば、ヨーロッパの過去を表している。過去が生きている辺境なのであった。

このような進化論への反発が人類学の文化概念を導きだした。ヨーロッパの古代であるどころか、未開社会はそれ自体の自立した価値を内包しているという相対性を帯びた文化概念が登場したのである。当然のごとく、この相対性を帯びた文化概念はロマン主義を内包する。未開社会は、近代の病理と汚点を批判する資料を提供した。近代を普遍と同一視し、全人類学が近代へと嚮進しているという進歩的歴史観。人類学は、その進歩的歴史観が支配する諸科学に向かい対抗的に自己を位置づけた。山口昌男など、1960年代後半の文明批判は、このような系譜にある。

したがって、人類学をこのような文明批判の系譜で理解するとき、1960年代に起きた「人類学が植民地主義の分身である」という批判を、多くの人類学者は驚き、と同時に少数の人類学者は自戒の念をもち受け止めたのである。未開社会が文明による破壊を経験するときその代弁をする者、人類史のために消滅する社会を文字に記録する貴い仕事をする者、文明の横暴をその内部から告発する者、というそれらの自画像があっけなく破壊された。(レイモンド・ファースの回想。)リベラルな価値観を保持していた人類学者は、突然、植民地主義との癒着を指摘され、戸惑った。

同様な状況は、日本でも起きていた。ジャーナリスト本多勝一の人類学批判 研究される側からの視点を代弁し、人類学と植民地主義との癒着を批判 に対して、山口の反論はどれも歯切れが悪かった。彼は、本多もジャーナリストという仕事がかけて支配と被支配の関係の外にあるのではないこと

について自省を求めたにすぎなかった。

人類学者が自らを語る物語には、それが内部から語り継がれるものである限り、限界もある。最近では、世界史的視点から James Tully は、人類学と文明化言説とを結びつける批判をおこなった (Tully 2018)。おそらく、そのような批判は先住民たちも多少なりとも共有しているのだろう。なぜなら、先住民にとり、人類学は文明から覇権されてきた研究者にすぎないといっても過言ではない。ただし、個別の関係はもう少し複雑である。ジョージ・ハントとボアズとの関係は決して被支配者と支配者という関係では清算されない複雑なものであったことが判明している (Isaiah Wilner 2016)。

(3)【先住民性がえぐり出すセトラー・コロニリズムの実態：ハワイと先住民運動、北海道とアイヌ民族、琉球の先住民運動】ハワイ先住民運動は、1980年代の「ハワイアン・ルネサンス」以降、盛んになったといわれる。しかし、当時は入植者と先住民という対立軸ではなく、資本を支配してきた白人層(ハオレ)とそれに対抗する労働者層としてのローカルという区別だった。ハオレとローカルとの対立は、1930年代のマッシー事件以降だとする、エリック・ヤマモトの説が有力であった。また、このようなハオレを批判する先住民という対立は、トラスクが白人学生ジョイに対し加えた批判にも表れていた。

しかし、2000年中盤には、セトラーには日系人も含まれているという日系人研究者の仕事が現れる。日系人の多くは農園労働者クラスの子孫であり、白人の資本を支配してきた階層とは異なる資本蓄積の過程を経てきたことには違いないが、それでもハワイ先住民にはセトラーであるという「ローカル」というアイデンティティ内部からの自己批判である。

ハワイでは、OHAの理事投票権をめぐり、ハワイ人だけがその選挙権をもち、それは白人やローカルを排除する人種主義であるという訴訟も起きた。米国本土でも積極的優遇処置をめぐる訴訟が起きていたが、これらは歴史を無視し、民主社会の理念の一つである個人の平等という価値観に訴える。その視点からみれば、歴史のなかから発話しようとする者たちの見解は、いつまでも歴史に拘泥し、歴史を理由に自己の利益を推進する者たちというレッテル貼りを受けることになる。積極的優遇処置は逆差別であるとして批判するとき、「人種カードを切る」という表現がある。論理の転倒だけで人種主義を語るなどできないはずだ。はたして、人種主義の蔓延する社会で、パワーを持たない存在は、どのようなことばの意味においてパワーをもつ者たちを逆に、差別できるのであろうか。(トラスクによるジョイへの批判を参照。)

このように主権運動(ハワイでは先住民ではなく、主権運動という。それは、王朝が不法に併合され、自己決定権を奪われた状態が継続しているということ。米国によってなされる先住民=部族認定を拒否している。ハワイ主権運動に関与する者たちは、アカカ法を拒否してきた。J.Kehaulani Kaianui 2018)

沖縄県では、2008年、市民的及び政治的権利に関する国際規約(自由権規約)を筆頭に、かずかずの国連委員会(国連人権差別委員会)から琉球民族は先住民であるという勧告を背景とし、自己決定権の行使に向けた活動がある。そのなかで、遺骨返還をめぐる動きは、京都大学の頑固な拒絶にあり、社会的にも広く知られることになっている。その中心の松島泰勝は、百按司墓(風葬)から金関丈男によって持ち去られた遺骨29体(金関は移籍した台湾帝大に63体を移動。台湾帝大は返還に応じている)など、三宅宗悦によって奄美から持ち去られた遺骨も含めれば、総計312が京都大学に寄贈されている(宮城 2018:22)。

活動家たちは、これらの遺骨返還は国連憲章、国際人権規約で保障されており、それに基づき可能であるという。彼らは、フランス、アメリカ、そしてオランダが琉球王朝と交わした外交文書(通商状況原本)の返還も求めている。琉球国が独立国家であり、それを武力により併合されたという歴史は、ハワイの事例にも似て、違法であるという。そのため、植民地主義はいまだに継続しているという根拠ともなる。琉球民族の自己決定権の回復とは、これらの歴史認識と不可分である。この歴史観を、沖縄県だけでなく、多くの日本国民が受け入れるかどうか課題となっている。

アイヌ民族運動は成功をおさめたといえる反面、アイヌが置かれた歴史状況は、琉球民族よりもより厳しいのかもしれない。たとえば、アイヌがアイヌとして自己を認識することの困難さは、差別と闘ってきた歴史、文化、言語、宗教の崩壊、土地の簞奪という暴力の結果、現在ではアイヌ民族の現在とは、Tommy Orange (2018) が「穴の開いたソックス」と表現するように、文化の欠落でしかその特徴を語れなくなっているのかもしれない。つまり、彼がいう「思い出すことができない記憶」としての先住民としての生活である。

そんな時代、アイヌ新法ができ、文化や言語の復興、反差別教育の推進、アイヌ文化を中心にした地

域の活性化、狩猟や漁労権の拡大を認められても、すでに思い出せない記憶のなかにしか存在しない「アイヌらしさ」は、学者が収集してきた資料、学者から学ぶアイヌ語、歴史的にみれば自らの存在を消去してきた力の側に立つ人びとに依存することになる。おそらく、親川志奈子が島ことうば復興に賛成を主張する本土出身の知識人に違和を表明してきた理由も、ここにあるのだろう。そんな支援の声は、コロナイザーの身勝手な転身にしか聞こえまい。これまで否定されてきた言語や文化を、世界の潮流が変化したからとって、こんどはアイヌに対して強制するのは許せないと感じている人びとも多いだろう(山本栄子)

アイヌ民族が受けたダメージの度合いは、琉球民族よりも大きいかもしれない。しかし、反対にアイヌ民族が感じる欠落は、その欠落を埋めようとする新たな努力によって、新しい民族の姿が登場しないとも限らない。それを見据えてゆくことが肝心である。大都市札幌に移動してきたアイヌたちが、都市環境のなかでいかにしてアイヌとして生きるかという挑戦は困難な課題である。しかし、その困難な課題をクリアしてきたのが、アイヌの祖先でもあった。思い出せない記憶は、新たな、予期せぬ結合を生成する機会をも提供するかもしれない。それを見届けるのが、21世紀の人類学者の使命に含まれているに違いない。

#### <引用文献>

Clifford, James, 2013, Returns. Cambridge: Harvard University Press.

Kehaulani Kauanui, J., ed., 2018, Speaking of Indigenous Politics. Minneapolis: University of Minnesota Press.

松島泰勝・木村朗編、2019、『大学による盗骨』耕文社。

宮城隆尋、2019、「琉球人骨問題と自己決定権」『大学による盗骨』、18-36頁、耕文社。

Orange, Tommy, 2018, There, There. London: Harvill Secker.

Tully, James, 2018, Rediscovering the World of Franz Boas. In Indigenous Visions. Ned Blackhawk and Isaiah Wilner, eds., Pp.111-146. New Haven: Yale University Press.

Wilner, Isaiah Lorado, 2016, Raven Cried for Me. Ph.D. dissertation, Department of History, Yale University.

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計 3 件)

太田好信 2017 「先住民から学び、変容する学問を目指して」『民博通信』158号、20-21頁。(査読有)

太田好信 2016 「ポストコロナルになるとは？」『民博通信』154号、10-11頁。(査読有)

太田好信 2015 「見返され、名指される経験から生まれる反省」『民博通信』149号、(査読有)14-15頁。

##### 〔学会発表〕(計 5 件、うち2件は、国際学会または国際シンポジウム)

太田好信 2018 「遺骨を語ることは 歴史への反省から生じる学問の倫理」第72回 日本人類学会大会 三島市(三島市民文化会館、10月20日)における分科会「人骨研究の在り方: アイヌ遺骨研究が投げかける問題と人類学の未来を考える」(組織者: 瀬口典子・九州大学大学院比較社会文化研究院と五十嵐由里子・日本大学松戸歯学部)

OTA, Yoshinobu, 2108 “Unpacking Meanings of “Coming Home.” Presented as part of the panel entitled “Indigenous Studies at the Crossroads of Globalization and Settler Colonialism” at the Fourth World Social Science Forum on September 26, 2018, Fukuoka, Japan.

太田好信 2018 「収集された遺骨・副葬品のゆくえ」シンポジウム「アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ 返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説」2018年2月11日、JR博多シティ9階会議室2。

太田好信 2017 「エクリチュールと倫理 『文化を書く』(1986年)のアフターライフ」国際シンポジウム「民俗/族学のエクリチュール」日仏会館、2017年4月21日~22日。

太田好信 2016 「人文・社会科学のビジョンを描くための第一歩」シンポジウム「現代社会

における人文・社会科学とは何か 文化人類学からの応答の試み」(平成28年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」)2016年11月6日、福岡市早良区九州大学西新プラザ会議室A B。

〔図書〕(計 2 件)

太田好信 2018 「フランツ・ボアズ」と「ジェイムズ・クリフォード」を担当。『はじめて学ぶ文化人類学 人物・古典・名著からの誘い』(岸上伸啓編、ミネルヴァ書房) フランツ・ボアズ(16-21頁) ジェイムズ・クリフォード(215-220頁)

太田好信 2016 「文化人類学と『菊と刀』のアフターライフ」『日本はどのように語られたか』(桑山敬己編) 31 - 56 頁、昭和堂。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。